夢のひとひら

るる姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢のひとひら

【Ｎコード】
Ｎ１３９５Ｇ

【作者名】
るる姫

【あらすじ】
王族の屋敷に住むエメ。そこに住む母上と、執事のリヴァとののんびりな生活はノアと言う男の存在で全ては崩壊する。

第一話　ノア

…め　　え…　　…ぇ…め　　エメ…

「…？」

目を覚ますとかすかに残る夢の中での声。

一体なんだ…？

「エメ様。起きられましたか」

「リヴァ…。む。腹が減った。食事を頼む」

「かしこまりました、エメ様」

我はこの世の半分は壊せる力を持っているんだと言う。

父上からの教えだ。

――力をいれていいのは本当に困ったときだけだ。

全てはリヴァにまかせていればいいのだからな。

「エメ、起きたの」

「母上。そうだ。食事が済んだら少し家を出る」

「はい、はい。」

こっくり、こっくり頷くのは母上。

昔から体が弱く、我を生んだだけ素晴らしいと思う。

「エメ様、食事がととのいました」

「む。今行く。」

「すごいわよねぇ…こんな母からあなたのような頼もしい子が生まれるなんて。」

「我は我だ。何者にも負けん。母上は寝ていたほうがいい。」

「はい、はい。」

「エメ様ーーーーっ」

「待て、リヴァ。今行く。」

カチャ…

「今日の肉はルービアの肉か？」

「ええ、エメ様は舌も肥えてて羨ましいです」

「そうか？…ほらリヴァも食べろ。腹が減ってはこれぞと時にやくにたたんぞ」

「…かしこまりました」

リヴァは考えた事もなかったが何でも出来る。

子守でも料理も、裁縫も何から何まで出来てしまう。

リヴァは我の心の支えの一つだ。

「それはそうと、どちらに行かれるのですか？」

「む。聞いたな？」

「はい、今日はどちらに行かれるのかと。」

「少しの散歩だ。そんな遠くには行かん。射瑠（シャル）を連れて行くから安心しろ。」

「かしこまりました」

気晴らしの散歩だ。

屋敷にいても退屈はしのげん。

射瑠はオオカミのモンスターと呼ばれるもので、我にとっては番犬ｏｒ家畜。

「射瑠、出かけるぞ」

コツ…

コツ…

散歩などしても退屈はしのげんな。

何かないものか…

「ぅ”ーーーーーーーー…」

妖怪か?!

「何者だ、己!名を申せ!」

「ぅーーー…?…あ、エメ様」

人間か?

この敷地の近くにいると言う事は王族の者か?

…見えぬが。

肌着やズボンはぼろぼろ、顔は痩せほそっている。

「己、名はなんと申す？申さねば即妖怪とみなすぞ」

「…あ…、ノア…。」

「己身分はなんだ？王族の者ではなかろう？」

「なんて言うんでしょう…んと…　　無職っ？」

は？意味が分からんのだが…

「…とりあえず物知りなリヴァの所へ連れて行こう…」

「何？！何？！補導？！ぎゃあーーーーっ！！！」

今思えば、そんなことしなければよかったものだろう。

続く

第二話　本性

「家が火事にあっただと？」

「ほぉへす。ひーんな燃えちゃって。」

「食いながらしゃべるな、汚れるであろう」

火事…我の家には監視用家畜もいるから考えられないものだ。

それで彷徨っていた、とのことだ。

ゴクっと、ノアは口の中にあった食い物を飲み込んだ。

「出来たら！！ここで働かせてください！！」

働く？だと…？

「何だ、それは…。我に仕えるということか？」

「はい！！なんでもします！！命の恩人ですから！！」

ホントはリヴァだけでも十分なんだが…

ここで見捨てたら、きっとあと5日も経てば死ぬだろう。

命の恩人、か…

「いいだろう。バイト代は週に１０００Ｇ。それでいいか？」

「はいっ！！！！ありがとうございます！！！」

「で、お前は経験は何かあるか？」

「経験？」

経験も知らんのか？

「何かを覚えてるなど、特技とか…」

「特にないですねぇ」

な…？！　　何だと？！

「裁縫や家事は？！」

「あーできませんねぇ」

な　ん　だ　と　ぉ　…　？

「それでこのエメに仕える気か！！！！アホか己！！！！」

「でも遊びとかは教えられます」

遊び？

何のだ…？

「リヴァさんは完璧で、何でも出来るけど、それだからわからない所もあるだろう？」

リヴァは…　本名、ルアール＝リヴァ・ミルア。

ルアール家は代々我のサターン家に仕えるもの。

昔から全てにおいて特訓させられている。

だから遊ぶなんて、一年に一度するかしないかだろう。

「エメ様の、知らないページを埋められます。どうか、どうか…！！！」

「…我の知らない部分を埋めるのだな？」

「いいんですか？！」

「己惚れるな。リヴァにはさせたくなかった主な仕事は雑用だからな！！！」

「ありがとうございますっ！！」

「…ッエメ様…　　…あの愚民め…！！」

「リヴァ？昼飯を頼みたいのだが。」

「はい、かしこまりました。エメ様！」

さて。母上にノアを紹介しておこう。

「リヴァさん、何か手伝えることはありませんかぁ？」

「五月蠅い　だまれ愚民め」

「リヴァ…さん…？」

「御前のような愚民などがエメ様と喋れただけ光栄だと思え。エメ様には近づくな！！！！」

何だ？

「母上、少々行くぞ」

「何でですか?!理由は…」

「騒がしいぞリヴァ、ノア。何かあったのか?」

「いえ、なんでも御座いません。ノアさんとお話をしていただけです。」

「そうか?では行くぞ」

様子がおかしいが…

まぁリヴァにおいてそんなことはないだろう。

「ノアさん?ってどゆこ…」

「御前には主仕事なんてさせん。全て雑用をやれ!」

「なっ…」

「何だ？俺には逆らえんぞ？なんてったってエメ様が付いているんだからな？」

「…ぅ…。」

新たな仕いが出来てうれしそうな顔をしてるよ、エメ。

「母上、笑われて…どうなされました？」

「いえ、なんでもないのよ」

やがて世界は　破滅を迎えようとしていた――――――…

続く

第二話　本性（後書き）

ちょっと言葉が悪いですがリヴァを書いていくのは楽しいですw

リヴァのS、楽しんでください（笑）

第三話　悪霊

「おい、ノア。なんか周りが騒がしい。外に見に行ってくれ」

「かしこまりました。エメ様…でいいんですよね？」

「そうだ。頼む」

ノアのあの口調も板についてきた。

「じゃー行ってまいりますっ」

そう言って屋敷を出て、颯爽と走っていった。

「エメ様、夜飯はどういたしましょう？」

「今日はノアの大好物出してくれ。今日アイツ頑張ったからな」

「…承知しました」

だがノアとリヴァは仲が悪いそうな。

リヴァはノアの話をすると無愛想。

反対もそう。

何故だろう？

ガチャっ…

「エメ…様大変です！！！！！」

と、突然ノアが入ってきた。

すごく汗ばんで。

「何だ、ノア。事件でも起き…」

「し　し　し　少女が…」

少女？

「…よく分からんが行く！！！リヴァは夜飯を作っていてくれ！！！」

「はーい…」

ふて腐れた答え。

それよりも急いで外へ出る。

ノアはいつも何でも経験値があるのか何を見ても驚かないし（屋敷のものとか以外は）、

屋敷のものを見るより驚いた目をしていた。

きっと、何かある…

そう察しをつけていた。

「ここに…っ」

連れて行かれたのは屋敷の目の前。目と鼻の先だった。

そこには…

「…ぉ…ぅあぁ…」

少女…のようだが様子がおかしい。

「己…名を申せ。申さねば妖怪とみなすぞ」

「…ぉ…ぅ…る…か…ぐぁ…」

”るか”

そう名乗った少女は見る限り妖怪…と言うか悪霊だろう。

「エメ…様、これは…一体…？」

村に住んでいたノアは霊などは都会に未練を持つ。村では悪霊などいたほうが珍しいだろう。

「悪霊だ」

「どうするんですか…？」

「このままだと異世界とこの世界を繋げる穴が出来る…　祓うぞ。力のサポートを頼む」

「サポート…って」

「我のこの扇に念じるだけでいい　力が宿る」

「は…はいやってみます…」

母上より受け継がれた扇は代々サターン家は霊を祓う。

全てはこの世のために――――…！！！

バっ…

「この世に宿った命よ　今あの世へ還るべき時」

「ゃ…　　めろぉ…　　ぐぁっ…」

「眠れ」

「ぐっ…あぁぁあぁあああああぁぁぁあ！！！！！！」

「あれ…さっきの少女は…」

「この扇にこの世にいた記憶が宿り、少女の魂は異世界に還ったよ」

「…？」

ノアにはよく分からない様子。

まぁ、初めてだからな。

「まぁいい。夜飯を食べるぞ。帰る」

「あぁー！！待ってくださいぃ…」

第三話　悪霊（後書き）

エメは結構あの口調のくせに天然です。笑
やっと本編に入った感じです。。

これから様々な黒ワールドに踏み込んでいきますので
お楽しみにしていてくださいw

第四話　夢魔

「…メ…エメ…」

あの声だ…。

夢の中だろうか？

言葉を感じているのに目が開かない。

まるで金縛りにあってるように体も動かない。

『己…名を申せ。　ナイトメア…か？　さもなけば…』

「いえ、違います」

『では…、一体己は何なのだ？』

「あなたに会いに行くから…もう少し待って」

『待て。何故我を知っているのか？　何故このようなテレパシーのように…』

「真実は　もう少しで分かるから―――」

フっ…

…あ

体が起こせる…

目が開く。

一体…何者なのか…

「おはようございます…エメ様。朝飯の準備が出来ております」

「おぉ、リヴァ。今行く。待ってろ」

でも…

頭の中がスッキリしない。

まるでさっきの奴が何かを置いていったように…

「エメ様？」

「ん、あぁ。行く」

あれ？

そういえばいつもすぐ起きると目の前に出てくるノアがいないな…

「リヴァ、ノアは？」

「まだ寝てるようですよ。寝息は普通だから熱でもないでしょう。」

そうか…。

「む…。なんだ？今日はいつもより味が濃いぞ？」

「あっ！！！間違えてベラーソースを倍入れてしまって…」

何なのだ？

今日は皆どうしたんだ？

「珍しいミスだな。でもまだ食える。母上の分も持っていってくれ」

「かしこまりました」

我も変な夢？を見るし…

何か棲み付いたか？

でも気配は感じない…

「…食べ終わった」

食器をさげ、水を出しただけで終了。

「リヴァ――――…？」

しんと何も音がしない。

なんだか怖くなって背筋が凍りつくような嫌な予感が過ぎる。

「ノア…？母上…？」

「…ェ…エメ…こっちよ…」

あの夢の声…！！！！

声がするのは…ノアの部屋だ

そっと、そっとドアの前に近づくと、凍りつくくらいの霊気を感じる。

ドアノブに手を触れると、バチっと異常な静電気が流れる。

４０万ボルトはある…

「ノア？ノア。起きてるか？」

何も音がしない。

ただ霊気が着々と増えていく。

これは…

この霊気は…

！！！！！！

「開けろ！！！！！！！！」

ドアノブに触れずにドアを足で思い切り蹴る。

バンっ！！！！！

ドアがバタっと、部屋の方へ倒れると、少女…というより高校生ほどの大きさだ。

「己、名を申せ。申さねば妖怪と見なすぞ」

「ほぉ。そなた王族の者か。童（わらわ）に勝とうと言うのか？」

「己名を申せ。　妖怪なのだな？…夢魔か？」

「そうだとしたら、どうするか？」

「もちろん、祓うぞ」

バッと扇を広げ、夢魔の首に扇を付きつける。

「己が今すぐこの屋敷を出るなら話を聞いてやる。出て行かない場合は祓うぞ」

「そしたら、屋敷を出るわ。」

「でも、どっちでも結果は同じだがな？」

どちらにせよ、我が見つけたものは必ず祓う。

異世界と繋がりが出来てしまう。

そうなると――――――…。

「ほぉ。結果は同じ…ならば、祓ってみろ。童には１００ほどの人間の魂がある。
そなたが勝ったらあげようではないか。」

「いい景品だ。　だが、己が勝つ確率は零だと思え。我が絶対倒す

「!!!

第五話　戦い

「…」

戦いが　始まる…

「ところで、童が勝ったら景品はなんだ？」

「己が勝った場合？まぁ、ないと思うが…　我には　何もないぞ」

「何故だ？何故そんなことが言える？」

「屋敷は祖父のものだし、リヴァだって我が作った機械でもない。
ノアもそうだ。
…だから我には何も残らないよ」

そうだ。

我から何もかも抜けば…

我には何も残らない。

「なら、こいつを貰おう」
夢魔の指差す方向はノア。
「ノア？ノアは…」
「あぁ。そなたのものではない。だが、こいつは連れて行く。いいな？」
「…いいぞ」
どっちにしろ…我は負けん
”剣（つるぎ）”
脳にイメージさせ、実現させる。
「なんだ、そなた魔道師か？」
「いや、…我の能力だ」

すると、突如頭の中に言葉が響いてくる。

――――――お前が力をいれると　世界の半分は崩壊するぞ――――。

頭に父上の言葉が何度も何度も響く。

崩壊…　　崩壊…！！！！！！！！！！

「っく…」

「効いてきたか？その響く言葉は、頭の隅々まで行き渡る。…辛くてたまらんぞ？」

ぅ…っ　　　　あぁぁぁ…！！！！

「…――――――――ぅ…っくぁ…っ！！！！！！！！！！！！！」

頭が割れそうなほどに焼き付けられる。

憎くて、たまらない言葉が…。

「世界の崩壊が起こらないのはお前のせいだ　お前の存在が在るからだ。」

「世界がお前で守られているなら　世界を壊すのも、お前なんだ」

な…んだと…っ！？

「全てが　闇になれば良いのだ」

そう言い残すと、

夢魔は我の腹を目掛けて　剣を突きつけた――――…

第六話　死の意味

「っぐぅっ…ぅあっ……！！！！！！！」

腹に、深く、深く突き刺さっていく。

血液が、どんどん増えていくばかりだ。

「ふっ、剣に毒が少々塗ってある。そのうち毒は周り死に至るだろう」

っくっそ…っぅ…

何を思っても貧血なのか頭が回らない。

『…め…エメ…』

夢の者だ

な…んなのだ？

お前が夢魔でないのは分かったが…

一体…っ

『エメ…も…少しで…　　声が…き…こえな…なる…っ』

何故だ?!

何がっ…

『このまま…ではエメが…死ぬから…だ』

我が…　　死ぬ？

そん…なっ…！

『だから…　エメにす…こし力…を』

だんだん声が遠くなっていく。

力…とは？

少し話すだけで息が荒れてくる。

…ノア

ノアがかかっているんだ

「…っ　己だけは許さんっ…！！！！」

「攻撃するのだな？」

「な…なんだと？」

「今のお前には体力がもうない。つまり…かなり力を入れることになる。そうすると世界は…」

「滅びるのだぞ？」

世界が　　…　　滅びる…

「世界のベールのようなものはお前の存在だ。世界のベールが脱げたら、必ずしも滅びるであろう」

「何故…お前がそのようなことを…？」

「はっ、叔父の教えだ。”一つの世界には必ず守る守人がいる”と。
」

守人…

ではあちらの世界も守人が…　　っあぁ！！！！

「ぐっ…ぅ…っあ…！！！！！！！！」

毒が回ったのか目眩がする。

夢の者…

我は…お前が言うように死に至るのかもしれん…

「え…め様…っ」

「…！？　リヴァ？！」

そこには見当たらなかったはずのリヴァの姿が。

「何故っ…」

リヴァは、何も言わずに傷口を押さえた。

少しの血液を拭くと、夢魔を強い瞳で睨んだ。

「…なんだそなたは…この屋敷の使いか？　…はっ、まったく気配を感じなかった。ふん、力を何も司らないものか」

「…っ！！！！」

「…？！り…」

「っ…くっ…ぅ！！！！！！」

リヴァは、夢魔に見たことのない瞳の色をして、パンチを打ち付けていた。

第七話　リヴァ

「なっ…にぃっ…？！」

「…」

すっと、手を抜き、夢魔は倒れた。

「なっ…力のない者にこんなっ…」

振り返り、エメを見つめた。

切れ長の目で、見つめた。

「リ…ヴァ…」

「エメ様、毒をこの薬で抜いてください。これからは、私(わたくし)のターンです。休んでいてください」

「この…剣を…。お前にはっ…負担が大きいかもしれんが…」

「畏(かしこ)まりました。では、封印の時だけお願いします」

「…あぁ」

なんだか、安心できる。リヴァなら。

全てを、任せられる。

「リヴァ…頑張れ」

「えぇ。もちろんです」

「っふ…まぁ他人が作った魔技だ。負担が大きいだろう?」

「それは、あなたの判断にお任せします」

リヴァは負担が大きすぎるはずの剣を諸共にせず、普通に戦っている。

「なっ…？！何も司らないはずの御前が何故そんなに…っ」

「エメ様は必ず私が守らなくてはいけないからです」

リヴァ…。

そういい、本当に何も司るものもないリヴァはダメージも受けぬまま戦闘が続く。

毒を抜くと言う薬を飲むと、体が少し軽くなったような気がした。

本当に効いた…。

キィンッ…

剣と剣が激しくぶつかる。

「っは…だが童の方が力は上のはずじゃ…！！」

血まみれになった夢魔は元々にあった姿や性格は１８０度変わっていた。

「私は…負けません」

言い切ったリヴァは、何度か切られたものの、強さは圧倒していた。

「っくっ…何故だっ…何故御前などに…っ」

夢魔はくたばる様に倒れた。

「御前とは訓練の仕方が違うんだ。俺はエメ様のためなら、絶対負けない」

お…俺？

リヴァってそういうキャラだったか？

でも…

「嬉しい。ありがとな、リヴァ。行くぞ」

「（ぅ…この人全く気付いてない…）…えぇ。扇をお開き下さい」

バサっ…

「…この世に宿った命よ」

「や…めろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ…っ！！！！！」

「今あの世に還るべき時」

「…ッ…　　…」

何も、言わなくなった。

諦めたんだろう。

「眠れ」

「あぁぁぁあああぁぁぁああぁぁあぁあああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「素晴らしいです、さすがエメ様です。」

「構わん。おい、ノアを起こせ」

「おい、ノア。起きろ」

血が少し付着したノアが体を起こし、目を擦りながら目を開けた。

「…れ？ぅ？！15時？！俺…こんな時間まで寝て…？ってアレ？！血？！い　い　い　一体何が…」

全く状況が理解できていないノア。

「ふっ、馬鹿め。」

「え？！ちょ、エメ様ぁぁぁ？！？！？！？」

「エメ様♪血液はどう致しましょう？」

「着替えて風呂に入る。着替えた服を洗濯してくれ」

「畏まりました♪」

「え？ぇ？えぇーーーー？？？？」

その後自分に付いてる血を見て絶叫し、失神したそう。

第七話　リヴァ（後書き）

なんだかんだ言って、一番の天然はエメですw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1395g/

夢のひとひら

2010年10月9日22時53分発行